

一ヶ月溜めた精子を毒舌クールサキュバスに言葉責めにされながら搾り取られる



一ヶ月溜めた精子を毒舌クールサキュバスに言葉責めにされながら搾り取られる



## キャラ紹介

なかほら  
まさる  
中原 勝

男子高校生。学校の体育で使う男子更衣室で広がる一つの噂。一ヶ月射精を我慢したらその夜にサキュバスに出会い精気を搾り取られる……。そんな噂を真に受けたわけではないが試したくなった勝は、一ヶ月のオナ禁を偲んだ。

そして一ヶ月後、本当にサキュバスは現れたが……そのサキュバスは毒舌で罵る言葉責めばかりで、勝をマゾ化させていく。

レイ

毒舌クールなサキュバス。サキュバスは遊び相手として、そして食事の対称として彼女たちを呼ぶ人間の相手をする。その遊び相手として満足出来るか試すために、罵り射精を禁止したり、恥辱の限りを勝に尽くす。

一ヶ月溜めた精子を毒舌クールサキュバスに言葉責めにされながら搾り取られる

目次

サキュバスにメスイキさせられる	005
サキュバスマまんこにご褒美中出し	035
あとがき	053

## サキュバスにメスイキさせられる

体育の授業が終わった後の男子更衣室。そこで密かに噂になっていることがある。一ヶ月射精しなければ、その夜にサキュバスに出会い精気を搾り取られるというモノ。

ただの男子高校生の戯言。妄想話。しかし、それが盛り上がる年齢で、気持ち悪いほどの変態発言が絶えない。

「サキュバスって淫魔だろ？ 常にマンコ濡らしてんのかな、だったらハメてみてえ」

「てかガバガバだろ。締りないまんことか……処女サキュバスなら最高」

「ハメ撮りよろ」

「ハーレムで後ろからケツ向けさしてハメながら、違うサキュバスにキスされながら、もう一人にバックハグされながら巨乳背中に当てられたら死んでもいいわ」

「自分から手を出さずに、騎乗位サキュバスが欲望のままに腰振って喘ぎながら揺

れる胸を見て悦に浸るのがいいだろう」

それぞれの欲望をさらけ出す。まるでこの空間にサキュバスが張った結界でもあ  
るかのように欲情しきった妄想が止まることをしらない。

自分からハメて淫魔であるサキュバスを自称巨根でレイプしたいと――。  
手コキフェラでサキュバスにされるがままに誰た後に中出ししたいと――。

「誰かしねーかな」

「お前彼女いねーし、お前がやればいいじゃん」

「こんなのマジにするわけねーだろ。てか普通に一ヶ月もオナ禁とか無理だわ」

「分かるわ。でもサキュバスがマジでいるなら一回ぐらい淫魔のマンコ喰ってみ  
たい」

「それな、めっちゃわかる」

あくまで噂。あくまで妄想。淫乱な悪魔を想像するだけの根拠のない作り話。

何処が出所かも分からない。ただ話を膨らませ実行する人は居ない。

更衣室の妄想話を聞きながら密かに勃起させている彼――なかほらまさる中原勝を覗いては…

…

人見知りの弱弱しいサキュバスを乱暴に犯したい。

ロリサキュバスと合法淫乱セックスで、小さい口にペニスをぶち込みたい。

いっそ恋して純愛セックスへの発展なんか胸熱展開に期待を膨らませる。

他の男子も言っている、処女サキュバスの初々しい姿や、柔らかい胸にうもれるハーレムなんかも最高だ。

勝は口にすることなく頭の中で淫らに妄想を繰り広げ、耽<sup>ふけ</sup>っていると六時限目の開始を促す予鈴がなり、止まっていた手を動かし制服に着替え教室に急ぐ。

今日でオナ禁二十九日目。そこでサキュバスへの妄想を繰り広げる話を聞かされてしまった彼は、授業に集中できないどころかズボンの中でペニスを勃起させパンツにはカウパーでシミを作る始末。

勃起が落ち着いた掃除の時間ではカウパーでシミが出来た部分が冷たく、勃起で汗をかいていたのか蒸れて湿ったパンツがペニスと太腿を掠め、気持ち悪い感覚で気が散り、女性は鼻が効くと聞いたことがあり臭いが大丈夫かと不安に苛まれる。

出来る限り女性の近くを通らないように遠回りして風通しのいい場所に立ち、股間に自然と風が入り少しでも蒸れたパンツが乾き臭いも籠っていない事を祈っている。

ると、終礼の開始を知らせるチャイムが鳴った。

家に帰ると、沸き上がる射精への要望。

何かをしていないと、溜め込んでいる精液を放出させることだけを考えてしまい、勃起してピンク色の思考から抜け出せなくなる。

少し勃起するだけでカウパーが滲み出て、お風呂場に行きパンツを脱ぐとシミを作った部分は白く固まり跡になっていたり、家に帰ってから勃起したせいで、まだ乾燥せずにヌルヌルと糸を引く。

ずっとムラムラして、ペニスの奥にもどかしい熱が覚めず、身体を洗っている最中も勃起しっぱなしで無意識にペニスを上下に扱き気持ち良さに身体中が力む。

顔を前に向け鏡に映る自分の姿を見て冷静になり手の動きを止める。

今日我慢して寝て、明日学校から帰り夜を待てばサキュバスが目の前に現れ淫乱セックスを堪能できる。

バキバキに勃起したペニスを、器用な舌で舐めまわされ啜えられる。サキュバスの口の中はペニスが蕩ける程の快感なのだろうと容易く想像出来る。それに一ヶ月オナ禁した敏感ペニスならどれほどの快感が込み上げるのか楽しみで仕方がない。



真偽の分からないサキュバスの噂にこれほどまで期待出来るのも男子高校生の特権かもしれない。

最悪自慰になってしまっても、今までよりも感度が良く、久々に感じる射精感は忘れがたいものにもなるだろう。

勝には明日の夜の事しか頭になく布団に潜っても勃起してしまい、布団が亀頭に擦れ意識を背けられないまま、日の出を迎えてしまった。

週の最後、金曜日の学校は真面目な雰囲気にも呑まれ、寝れなかった疲労感も合わさり午前授業は全て寝てしまって授業内容は何も覚えていない。

昼食を終え、午後の授業は何とか起きてテストのためにノートに写すだけ写したが、眠気と夜への期待で教師の声は耳から耳へ流れ出て記憶には残らなかった。

終礼を終えると同時に不思議と眠気が吹っ飛び、友達からカラオケの誘いを受けるがキツパリ断り、すぐさま家に直行して部屋着に着替え、夕食を待つ。

この解放までの数時間が一番つらく一分が何倍にも感じ、ムラムラとズボンの下で勃起しているペニスとジツと見つめ、柔らかな細い指先で優しくもしつこく裏筋やカチを擦られながら手コキされたい。

そんな妄想を繰り返しているとドアをノックされる音が響き、呼吸を止め動揺してサキュバスの噂は本当なんだとドアを一点に見つめる。

サキュバスはやっぱりしっぱや角はあるのだろうか。

体系はぼつきゅっぱんの色気満載の体系なのか、もしくは逆に貧乳のクール系か、身体の小さいロリ系か……どんなタイプでも綺麗で色欲の塊であることに変わりはないはずだ。

ゆっくりと開く扉の先には……、茶髪のロングヘアにいつもの見慣れた顔立ち。

柔らかい垂れ目のストレッチ生地の部屋着を着た年下の女性。

「お兄ちゃん？ ご飯出来たって、すぐ食べる？」

可愛らしい仲のいい妹だった。

時計を見ると、午後七時を指していて夜に来ると言っても確かにまだ早いか。

「あ、ああ……ありがとな、芽依めい。すぐ……あー、少し整理して行くよ」

「分かった。お母さんに伝えとくね」

妹——、芽依に夕食を呼ばれるが、ガチガチに勃起させたままりピングに行くわけにも行かず、腹筋やスクワットと道具を必要としない簡単な運動をして勃起を抑える。

勃起が落ち着き、パンツの中を見るとカウパーで濡れて気持ち悪く、やはり蒸れの臭いも気になりパンツを脱ぎノーパンで部屋着のズボンを履きリビングに向かう。芽依と目が合い、優しくニコっと笑ってその笑顔に癒されながら席に着き食事を済ませる。

それからお風呂に入り部屋に戻ると午後九時前となって居たが、来るとしたらいつ頃来るのだろうか。

今日でオナ禁を止める心づもりをしていた分、今までとは比にならない程頭の中はほわほわとピンク色に染まり腰の奥だけでなく胸の奥もペニスを弄って早く解放したいと苦しくなっていた。

このまま後何時間待てばいいのか。触らずとも苦しさが爆発しそうなペニス。快感が欲しい。もう抜いてしまいたい。一ヶ月もオナニーをしないで溜めていたストレスと欲望が入り混じり、息を荒くしながらズボンを下ろしビンビンに勃起させた変態ペニスを露わにすると、勃起して我慢していた分汗を掻いてムワっと臭いが立ち込める。

ベッドに座り、自身のカウパーで亀頭を濡らしているペニスをジッと見つめる。

この勃起したペニスをサキュバスのトロトロに蕩けた膣の中に入れてらどれ程の快感が押し寄せてくるのか。はたまた人間と全く同じ構造なのか。

そんな想像をしているうちに、導かれるようにペニスを握り上下にゆっくりと扱き始めた。

ただ上下に擦るだけで腰を跳ねさせて仕舞うほどに敏感になっているペニスはそのまま射精へ導くだけでは勿体無いとさえ思える。

そもそも自慰のためにオナ禁をしていた訳ではない。

サキュバスに会える。サキュバスと濃厚セックスをしたい。そう思って始めたオナ禁は無意識に始めてしまった自慰行為で歯止めが聞かなくなってしまった。

そもそもサキュバスだなんて非現実的な仮想上の生物だ。ここで我慢したってサキュバスになんて会えるわけが――。

「……気持ち悪いですね……早速一人でオナニーですか」

突然、聞きなれない冷静で凍とした声色がドアとは単体の窓のある方から聞こえた。

自室は二階で周りに登れるような場所はない。

それに声の近さからして部屋の中……。恐る恐る顔を上げ左の方へ視線をずらす

と、ウェーブの掛かったピンク髪に白いハイライトに人間ではない事を象徴する牛のような、伊達にアメジストの如く紫色に輝く角、腰の下の方から生えている先端が二股にハートの形をしている黒いしっぽ。

男の性欲をそその露出の多い服装……というよりも上半身はただ乳首が隠れるように布を被せているだけのような付け襟、ギリギリまで責めている黒いホットパンツ、膝上まであるヒールブーツ姿が三日月の月夜に照らされて窓枠に座っていた。

そんな彼女に冷やかかな侮蔑ぶへつの視線を向けられる。

窓枠に座ったまま勝はガン見され、自然とペニスを扱く手も止まっていた。

「何見てるんですか？ 私を呼んでおいて一人でしたいならどうぞ。見てて上げますから」

「え……あ……」

彼女を呼んだ……。彼女と窓の隙間から見える月の位置——ふと時計を見ると深夜十一時半。

絵にかいたようなサキュバスの容姿をしている女性が、普通なら不可能な窓から室内に侵入して来た。

一ヶ月射精しなければその夜にサキュバスが精気を搾り取られる。

このシチュエーションで何を疑う事があるだろうか。サキュバスに出会えた。彼女の姿に期待と妄想が風船の様に膨らみ続ける。

「オナニーが好きなんでしょう？ ほら、女性に見られながら自分で扱きなさい」  
「えっと……本物……？」

「見て分かりませんか？ ……忍耐力だけでなく理解力もないんですね。見ての通りサキュバスです」

「じゃ、じゃあ——」

何かお願いしたい。結局は淫魔だ。プレイをさせてくれるんじゃないか。

彼女に近づくためにベッドから立ち上がる。

「近寄らないでください。早く自分のおちんちんでも可愛がったらどうです？」

理想とは程遠い彼女の対応に風船のように膨らんでいた期待と妄想は割れることなく萎んだが、サキュバスの色欲のオーラに当てられてか、一ヶ月オナ禁していたからか勃起が収まる気配は一向にない。

勝は静かにベッドに再び腰を下ろし、彼女の足元や露出している健康的なお腹、下乳が丸見えのおっぱいを見ながら、彼女に言われた通り自身のペニスを握り上下に扱く。

「本当に扱くんですね。気持ち悪い……」

「え……」

「だってそうでしょう？ 私の柔らかい手で、シコシコ、扱かれたくて、この熱い口で舐められて、サキュバスのトロトロ、おまんこに挿れたくて、馬鹿みたいに我慢するのに、獣みたいに、自分で、扱いて……」

勝がされたかった事を的確に、そして興奮する言葉に抑揚をつけ目立たせ欲望を煽る。

そしてそれは自分がそう望んだかのように、自分から自慰を始めたことを強調しながら冷ややかな視線でペニスを見つめる。

言葉だけでゾクゾクと背筋をなぞる気持ち良さが走り敏感なペニスを扱く手を止められなかった。

これがサキュバスのフェロモンによるものか、勝の性癖がそうさせてしまうのか。「これだけ言っても止めないんですね。……サキュバスのおまんこに入れたくてピンピンおちんちんをシコシコするの我慢したのに、そのサキュバスに見られながら罵倒されてるのにオナニーして気持ちよくなっちゃう変態。そういう状況だって理解してますか？」

恥ずかしい状況を言葉にされる恥辱を受ける度に、羞恥心たびが込み上げそれが快感へと変わっていく。

勃起していたペニスはより固さを増し、止めたい手は気持ちとは反発し射精に導く本気の扱きを始めた。

「うわ……もしかして本気で興奮してるんですね。気持ちいいですか？ サキュバスに見られてする無様なオナニー」

コツコツとヒールの音を鳴らしながら勝にサキュバスは近づいてベッドに登り彼の背後で肩に手を掛ける。

触られた肩からジワジワと熱が広がって身体が火照って意識が朦朧としていく。

「ほら、一ヶ月振りの射精ですよ。おちんちんビクビクさせて犬のしっぽみたいに必死に媚びたらどうですか？」

吐息からかが掛かるほど近く、甘く女性のいい香りを漂わせながら耳元で優しく自尊心を揶揄われ、肩を小さく震わせ目を細める。

「気持ち悪い表情しないでください。サキュバスが居るのにオナニーでイッチャイイそんな雑魚ちんぼのくせに」

「あ……」



一ヶ月溜めた精子を毒舌クールサキュバスに言葉責めにされながら搾り取られる

試読は以上になります。続きは製品版でお楽しみください。